

タイプなコミュニケーションが親しい人間関係のひとつの表われであることが、私たちがネガティブなコミュニケーションに寛容になりすぎていることの前提条件になっていると思う。それが、教室では、好意を持ち合っている男女生徒をからかったり、宴会では、飲めない人にイッキ飲みを強いる風土を形成している。男女をからかったりイッキ飲みを強いるのは、日本ではまだギリギリ許容範囲の内側であろうが、欧米の社交水準では許容範囲のはっきり外側である。この延長にいわゆるいじめやあてこすりがあがる。

こんなふうに考えてみると、私がここで問題にしているテレビシンの大半が、許容範囲の外側だということがはっきりすると思う。よほど親しい間柄なら許容され得るかも知れないが、親しくない間柄なら許容されないコミュニケーションである。しかもその一般的には許容されないやりとりを、あろうことか電波にのせ、自らも笑いな

がら、視聴者の笑いを誘うべく番組として構成することはやはり許されないとどうだろう。

悪貨は良貨を駆逐する。この経済学の原則は、テレビ番組にもある程度該当する。しかし、いま良貨を駆逐しつつある一群の「お笑い番組」はいじめの土壌となっている市民文化の異端部だけを肥大させた異端児であることを自覚するべきである。放送界には自

### 百年マンションで都市再生を

東京工大助教授 橋爪大三郎

日本は狭い。そして山が多い。おまけに人口は一億二千万人。いきおい、平地といわず山腹といわず、びっしり民家が建ち並ぶことになる。子供の頃からこうした景色を見慣れていると、これが当たり前になってしまふ。外国に、ここまでごみごみした街並みはめずらしい。第三世界の大都市の

スラムは別である。先進国には都市計画というものがあがり、だれがどこに住むかが事前に練引きされていて、秩序ある都市の景観を保っている。しかも誰もが、日本よりずっと安く、ずっと快適な住宅で暮らすことができる。このギャップは何だろう？ 日本の国土が狭いからか？ そうではなさそ

うだ。狭ければなおのこと土地を有効利用しなければならぬのに、庭付き一戸建てとか日照権とかいった時代錯誤の観念が生き残っていて、効率の悪さに輪をかけている。東京都民がゆったり住むのに、集合住宅を建てれば土地は山手線の内側だけで十分という試算もあるのに、二十三区↓市部↓三多摩と、地衣類のようにびっしり低層の個人住宅が拡がっている。これでは遠・高・狭は必定、サラリーマンは自分で自分の首を締めているのだ。

日本には、都市文明の伝統がない。ヨーロッパも、中近東も、インドも中国も、都市国家の時代を経過した。文明とは都市国家のことである。頑丈な城壁に囲まれた空間は、安全な生活を享受できる憩いの場であるとともに、高価なコストがかかった公共の場であった。都市の土地は、天然のものでない。「私有」するなんてとんでもない。都市の土地利用に、公共の制約が加わるのは当然なのだ。

ところが日本には、都市国家なんてなかった。城壁の材料がないわけではない。石がなければ煉瓦を焼いてでも城壁をつくるのが、都市国家である。平城京も平安京も、中国の本物を真似したことになるが、周りは土塀。十年もすれば台風で崩れてしまふ。外敵がいらないのだから、城壁なんて造るだけムダである。となると、都市と農村の区別がつきにくい。いやそれも、日本の都市は図体が大きいだけ、本質的には農村と変わらないのだ。それでも江戸時代には、鍛冶町だの紺屋町だの、都市計画めいたものがないわけではなかったが、江戸が東京になった途端に、大名屋敷跡にはベン

草が生え、それから無秩序な建築ラッシュが始まって、都市が公共のものであるという感覚は消しとんでしまった。バブル経済がはじけたおかげで、地上げも収まり、地価もひと頃の半分以下になった。それでもなお七十平米ク

ラスのマンションが、年収の五倍でも買えない。これを政治の無策と言わずに何と言おう。先進国が聞いてあきれ

#### 「百年マンション法」制定を

土地問題は、旧住人である地主、ローンで土地を買った人、ただの間借り人……の利害が複雑に入り組んでいて、簡単に解けない。無理をすれば（たとえば土地公有などを強行すると）、誰かにしわ寄せが行く。現行制度のもとで、すでに権利をえている人の利害をそこなわないようにするには、時間をかける必要がある。

では何をすればいいか。目標は、都市に生活するすべての人びとに、快適な住居を提供すること。都心に近く、緑が豊かで、いまの三倍くらい広い広さがある住居。それには土地の利用効率のよい、集合住宅をたくさん建てることだ。いまの日本に、それくらいの経済力はある。建設コストがかさむ分

は、耐用年数をいまの三倍以上に  
カヴァーしよう。すなわち「百年  
マンション」である。

いまの住宅は、三十年も経たないう  
ちにとり壊されるべらべらの建築だ。  
核家族にあわせた設計なので、子供が  
育ったあとは空き部屋になって無駄で  
ある。こんなものを一代限りでつぎつ  
ぎ建て替えるより、半永久的な建物を  
こしらえよう。百年経つあいだに技術  
も進歩して、時代遅れになるといけな  
いので、電線や配管は取り替えやすい  
ように、縁の下を這わせておく。構造  
部分を鉄とコンクリートで百年もつよ  
うに造るわけだが、天井を高くして、  
縁の下もつくる。通風がよくて、日本  
の気候にはびつたりだ。

さて、まず三十年後をめぐり、都市  
計画をつくる。都市計画とは要する  
に、土地の利用を制限することだ。現  
状にはとらわれないで、ここは道路、  
ここは図書館……と線引きをする。残  
りの土地は、適当な大きさのブロック

(一丁目の区画ぐらゐ)に区切り、百  
年マンション建設候補地とする。ロの  
字型かコの字型に十階前後の建物を建  
てて、ひと棟に数千人が住む計算だ。  
ブロックごとに、住民の過半数(たと  
えば三分の二)が賛成したところか  
ら、順次マンションの建設を始める。

建設に反対の住民にも補償は一切しな  
いで、ほかの住民と同様、出来上がっ  
たマンションの権利(所有権ないし居  
住権)を割り当てるだけにする。だ  
いぶ先の話なら、最近家を建てたばかり  
の人もまあいいやと思えるので、プロ  
ック住民のコンセンサスを得やすく  
する。住民の意見がまとまらずに出遅れ  
た候補地は、マンションを建設しない  
で、緑地にすることに決めておく(そ  
の場合、住民は、よそのマンションの  
権利の割り当てを受ける)。

この都市計画は、東京圏や大阪圏の  
ような人口密集地域を対象にする。国  
会で法律を制定し、それにもとづいて  
各自治体が計画を作成する。そのと

んに地価はじりじり下がりはじめ、三  
十年後にはタダみたいになる。建設コ  
ストを考えてみよう。現在でも、すべて  
の住宅はほぼ三十年ごとに建て替えら  
れている。しかも、計画が発表されれば、  
マンション予定地で新規の着工は  
ストップする。つまり、ロスはあまり生  
じない。土地取得のコストがゼロなの  
で(つまり、土地所有者が自分でマン  
ションを建てるかたちになるので)、費  
用は建設コストだけ。十階建てを建て  
れば、建設コストはかかるけれど、床  
面積もうんと増えるから、半分程度を  
売りに出すか賃貸できるはず。住宅金  
融公庫みたいな「百年マンション・ロ  
ーン」で十分まかなえるはずだ。

### これだけあるメリット

経済効果はどうか。景気を刺激する  
のは確実だ。しかも、同じ鉄とコンク  
リートでも、道路をつくる公共事業と  
は違う。まず、住居がぐんとひろくな  
るのだから、耐久消費財など消費需要

の拡大がみこめる。通勤時間が短くな  
るから、生産性も上がる。夕食を食べて  
から映画や音楽会にも行けるだろう。

これらはみな、消費を拡大する。しか  
も道路と違い、集合住宅は、子や孫の  
代まで残るわれわれ国民の財産であ  
る。本格的な高齢化社会を迎えたあと  
では、税金や医療費や保険料の支払い  
に追われ、住居にまで資金が回らな  
い。まだ余裕のあるいまのうちに、長  
い目でみて資源の節約になる百年マン  
ションを建てておくべきなのだ。  
要は政治の問題だ。政治家が、コス  
ト・メリットをしっかりと専門家に研究  
させ、国民の利益になると確信でき

ら、この法案を提出する。計画がスタ  
ートすれば、さっそく百年マンション  
があちこちに建ちはじめる。三十年後  
には、東京も大阪も、見違えるように  
居住性の高い都会に一変しているだ  
らう。

### 過疎は恐るるに足らず

東京圏や大阪圏はこれでいいとし  
て、ほかの地域はどうなる? 郊外は、  
無秩序なスプロールが止まって、むし  
ろ少しずつ住宅が減っていく。家賃も  
安くなるから、一時的に、低所得者や  
老人世帯が増えるかもしれない。そし  
て都市近郊の緑地帯に、戻っていくは

ずだ。地方都市は、同じやり方で都市  
計画を立ててもいい。ただし、土地利  
用効率をそんなに高める必要がないの  
で、集合住宅は五、六階建てでよいだ  
らう。

農村はどうなる? 都市の居住性が  
高まれば、そして住宅供給が増え家賃  
が下がれば、都市に移り住む人間がま  
すます増えるだろう。過疎を通り越し  
て、無人となり放棄される集落も出て  
こよう。田畑のなかには荒れるにまか  
せるところも出てくる。どうする?

無理に過疎をくい止めなくていい、  
と私は考える。過疎地域は老人が多く  
て若者が少ないが、これは一時的な現

視野狭窄の平成の世に、空前のスケールで  
衝撃を与える「総合」大年表、発刊迫る!

# 國史大年表

日置昌一  
日置英剛 編

【推薦】

荒俣宏 色川大吉 梅津忠夫 尾崎秀樹 紀田順一郎  
津本陽 中村元 奈良本辰也 森村誠一 五十音恵

◆新界随一の膨大な情報量を誇る、  
万人のための超一級参考資料  
◆日本歴史の全貌にわたり、政治・経済・  
社会・文化等、あらゆる分野を網羅  
◆正確かつ詳細な内容、すべての記載  
事項には出典を明記  
◆読みやすさを重視した大きめの活  
字と縦組みの本文、豊富な振り仮名  
◆想像力と洞察力を喚起する豊富な  
関連資料を多数引用、日本の通史を  
鳥瞰できる総合大年表です。

全8巻+索引

1~8巻定価12,360円(税込)  
A4変型判/平均約800頁

12月刊行開始  
予約受付中  
内容見本進呈

本書は一般書店では取り扱  
っておりません。ご予約・  
内容見本請求は下記まで、  
電話・ハガキ・FAXで。

双樹舎

〒112 東京都文京区小石川  
2-3-28-405  
Tel 03(3818)7729  
Fax 03(3818)7327

## 「グルメ大国」が聞いて呆れる

大蔵省診療所所長 栗原雅直

象だ。もうしばらくすると、もつと人数が減る。農地の地価は、限りなく安くなる。平坦な水田や畑が残っていて、機械化した大規模農業で採算がとれるところは、そうすればよい。それが無理なところは、自然に戻せばいい。もともと日本の山野は、人間の手も加わらぬ照葉樹林が鬱蒼と生い茂っていた。山間部や傾斜地は、幹線道路を残して、百年をかけてそんな自然に戻してやればいい。農村には農村の、国土利用計画があつていいのである。

農業ばかりが産業ではない。百年マンションの住人たちに、安価なセカンダリ・ハウスを提供するのもいい。百年マンションの建設組合と、農村とが契約して、都会の人びとが農村で、貸し別荘よりも格安で逗留できるようにする。長期滞在型のバカンスにもよし、小学生のサマーキャンプや農村留学にもよし。過疎が進んでこそ、そういう産業が成立できる。過疎恐るべからず、である。

正月休みや医学関係の国際学会で外国旅行をすると、日本の「食」は世界の食からはずれて特殊になつていふと思ふことが多い。

イタリアのフィレンツェに行つたときのこと。学会のあといいよ遊びだと思つて、汽車でベネツィアに廻ろうと思つた。中央駅で特急の指定席券を買おうとしたら、発車の二時間前に発売を締め切つたという。「いいからそのまま汽車に乗るよう」とイタリア語で言つたように聞こえた。

目的の列車に乗りこむと、車掌はコンパートメントの入口ドアの上に、プリントアウトした乗客の名札を順番にはさみこんでいた。名札が出ていない席に勝手に座れと言う。事情はどうも次のようなことらしい。

い。そもそも特急列車は空席があるのが常態である。二時間前に窓口を閉めるのは、乗客リストを確定し、車掌が乗客の名札をドアの上にはさみ込む時間的余裕をもつためである。つまり名前と人格をもつ乗客に、車掌のパーソナルなサービス（あるいは監督）を及ぼす昔ながらのシステムが、そのまま生き残つていたわけである。

日本の列車では、自分も隣の乗客も、何番列車、何号車、何列何番という無名の記号と化して怪しむことがない。刑務所の囚人と同じである。

効率のためには、人格も記号化したほうが便利には違いない。しかしこうした効率至上主義が、すでに人間の周囲との係わり方を変質させていることが見逃されていふ。人間にとつても

とも基本的な営為である「食」の世界でも、それが顕著に見られる。

まず食事の場が持つ精神的、情緒的な意味が失われている。最近レストランのテーブルは、四人が対面式のものからカウンター方式に変わつてきてゐる。

個食の時代と言われるが、一般の家庭でも同じことで、両親とも不在のところから帰つた子供は、準備されたカレーライスを、寒々としたテーブルでひとり淋しく食べる。過剰なほどの健康ブームでありながら、「食」の持つ情緒的なサポート機能やストレスからの回復機能は、二の次にされているのである。いったいどんな子供が育つのだろうか。

そもそもレストランとはフランス語に由来する言葉で、食事によって生命と元気を回復するといった意味がある。食物そのものではなく、食べるといふ行為が元気を回復させるのだ。このころの健康にとって、家族や仲間と食

事を楽しむことは何よりの薬になる。動物は、セックスや食事のときには警戒を緩めるものだが、そういう集団の中で心を緩ませることが「癒し」につながるのである。

食堂のカウンターで物を言わずに食べるのはまだましである。自動販売機にコインを入れ、だれの顔も見ないでものを食べたり飲んだりする人が増えてきた。自動販売機でうどんを食べたり、栄養バランス食品なるものを買つたりして、われわれのストレスは癒されるだろうか。

効率といえ、自動販売機ほど機能したものはない。車を自動販売機の前で止め、コインを入れるだけで湯きを癒せる。オリゴ糖だの繊維質だの、「栄養」も摂れる。飲んでしまったジュースの缶は路上にポイ捨てすればよい。

私は医者だが、ジュースの自動販売機を見るたびに、缶を作るためにどれだけの電力が消費され、それがどれだ

け地球の森を減らし、缶を片づけた海がどれだけゴミで埋め立てられるかを考えてしまふ。コイン・ジュースを飲めば器械に甘えることはできるかも知れないが、無機質なもののへの愛着は、人間そのものをも平気でポイ捨てできるような感性のない人間を生むだけだ。器械とだけ対話ができ、人間とは付き合えない人間ばかりになつてしまふのではないか。何やらうすら寒いものが感じられるのである。

### 日本の食に生の喜びはない

何を食べるかについても、食べる食べられるという、食物連鎖における闘争と依存関係の様相が切り捨てられていふ。たんに食べるといふ記号の問題と考えられつつあるようだ。その結果、食品の味も形も画一化され、それはスーパーなどで何の苦労もなく簡単に入手できるが、本当の味は失われてしまつていふ。そして商業主義によるネーミングが本質的なところとはま

「グルメ大国」が聞いて呆れる